岡崎市美博ニュース
【アルカディア】

# Arcadia

OKAZAKI CITY MUSEUM NEWS

VOL.29

日本初公開作品
アメデオ・モディリアーニ
「スウェーデン娘《アニー・ビャーネ》」
1919年　個人蔵

特集

## 岡崎市美術博物館10年の歩み

エッセイ
## 藤田嗣治シンポジウムから

開館10周年を機に
## マインドスケープからエコール・ド・パリまで

## アートに生きる、アートで元気!

## 徳川四天王展に寄せて

OKAZAKI MINDSCAPE MUSEUM
岡崎市美術博物館

ESSAY

# 藤田嗣治シンポジウムから

館長 芳賀　徹

この間の6月10日　、11日　と二日にわたって、京都造形芸術大学主催で、「藤田嗣治と1920年代のパリ」を主題に国際シンポジウムが催された。

第一日目は、いま藤田展が開かれている京都国立近代美術館のホールで、二日目は朝から夕方まで造形芸大の大教室でおこなわれ、どちらも熱心な聴衆で終始満員だった。若い学生たちよりも中年老年の紳士淑女が目立ち、このたびのはじめての藤田回顧展が市民の間によびおこした関心の強さ、人気の高さをよく示していた。

シンポジウムの総合オーガナイザー、そして二日にわたる司会役をつとめたのは、造形芸大の大学院長で大原美術館の館長である高階秀爾氏。だが、助成金の申請から海外との連絡やパネリストの旅行の世話まで、実際面の運営のすべてを引受けてこなしたのは、美術史助教授の林洋子氏だった。林さんは過去十年ほどか、藤田嗣治の画業の研究に打ちこみ、その結果を『旅する画家藤田嗣治』と題する大冊のフランス語論文にまとめ、今春それによってパリ大学で成績秀の博士学位をとったばかりの専門家である。

その林さんの発表はもちろんのこと、国際日本文化研究センター教授の稲賀繁美氏の黒田重太郎を中心とした発表も、大原美術館学藝課長柳沢秀行氏の1920年代在パリの日本人画家たちに関する報告も、みなそれぞれに大量の新資料を盛りこんで実に面白かった。日本敗戦後四年目の1949年、日本というよりは日本人の節操のなさが嫌いになってフランスに帰り、フランスに帰化して、1968年1月81歳で亡くなるまでついに母国に帰ることのなかったレオナール・フジタ、彼の画業と波瀾の生涯には、まだ調査研究されるべき課題がたくさん秘められていることが、かえってよくわかったシンポジウムであった。

アメリカのネヴァダ大学から参加したアヤ・ルイーザ・マクドナルド教授の、1920年代の藤田の自画像分析の話は、画家の表情の心理解剖ばかりでなく、その室内に描きこまれた各種小物の意味合いにまで探りを入れて、一種文学的な興趣さえあった。最後には、戦前フランス美術の研究のヴェテランで、林さんの論文の主査でもあったパリ大学のフランソワーズ・ルヴァイヤン教授が特別講演というのをしたが、その冒頭に、フランスの美術史学界でもフジタを研究することにはいつも一種の「居心地の悪さ」（マレーズ）があったことを告白して、はなはだ印象的だった。

フランスでも日本でも、フジタの画業の全貌を知る人は（林洋子さんの登場にいたるまでは）またほとんど誰もいなかったこと、フランスでは1920年代のエコール・ド・パリ時代の事蹟と最晩年のことはよく知られていても、大戦前後の日本滞在中の仕事は知られていないし、日本では彼のいわゆる「戦争画」の問題がいまだにトラウマを残している。フジタの作品の評価に不安定要素がつきまとっていた上に、彼の版権に関して長い間未亡人側からきびしい規制が加えられていたことなども、この「居心地の悪さ」をつのらせ、研究者をためらわせていたのだろう。

だが、このたびの東京・京都での没後最初の展覧会と、今回のシンポジウムは、はじめてフジタ研究をめぐる、またフジタ自身も生涯を通じて感じていたにちがいない「居心地の悪さ」を、解消したのではなかろうか。少くとも解消への決定的な一歩となったのではなかろうか。

私自身、シンポジウムの最後に、そのような意味合いの「総括」をした。そして席から立ってそのような挨拶をしている間に私が気がついたのは、この二日間をとおして、数百人の全出席者のうち、直接に画家藤田嗣治と会ってその話を聞いたことがあるのは、私と、総合司会の高階秀爾氏との二人だけだ、ということだった。

いまからもう半世紀も前、1956年、57年のパリでのことだ。二人ともフランス政府給費留学生として、高階氏はドラクロワなどのフランス美術史を、私は比較文学をパリ大学で学んでいた。二人とも小学校、中学校、そして旧制高校、新制東大と、大学卒業までまったくの同窓しかも同級という珍しい関係だった（パリにはもう一人の同窓同級生もいた）が、その私たちの母校東京高等師範学校（現筑波大学）付属小・中学校の四十三年上の大先輩（1905年中学卒業）が藤田さんだったのである。

1950年代後半のパリには、日本人は三百人ぐらいしかいなかったが、そのなかの二十人ほどが「付属」の同窓生で、長老格の日本大使館参事官河野達一氏がときどき自宅で同窓会を開いてくれた。いつも腹をすかしていた留学生の私たちは大喜びでその会に参上した。すると、私たちよりも先に河野邸にやってきて、河野夫人に大きな薔薇の花束を捧げて椅子に安座し、にこやかに私たちを待っていたのが藤田画伯であった。

真白なオカッパ頭に丸眼鏡の藤田さんは、夕食の最中も後も一座の中心で、つぎからつぎへと愉快な昔話を（もちろん日本語で）してくれた。河野夫妻もふくめて私たちは一晩中、藤田さんの話術のうまさにのせられて笑いころげていたのである。

エコール・ド・パリ時代の回顧談でも、仲間の画家たちのことよりは「狂気の年代（レ・ザネ・フォル）」の乱痴気騒ぎの滑稽談をつぎつぎに披露してくれ、日本のことといえば「付属」の小中学時代にやったいたずらの話ばかりだった。そして藤田さんもさも愉快そうに笑って、夜中まで私たちとつきあってくれた。高階君などはあのとき、藤田氏に同時代のパリや日本の画壇の話を聞いておけばよかったと、後になって思ったかもしれないが、それはまさに後の祭り、彼もただ笑いころげていたのである。それに藤田さんは、1950年にパリに戻ってきて、55年にフランス国籍を取ったばかり。こちらから訊ねても日本の画壇のことなどは語るのもいや、という気持であったろう。あの同窓会はパリの藤田さんにとっても、気がねのいらぬ、なつかしいアジールだったのだと、いまにして思う。

考えてみれば、あの1956、7年のころ、藤田氏はまだ70歳代のはじめ、高階君や私は二十代の半ばだった。そしていま彼も私もその藤田氏よりは数歳年上になってしまっている。信じられないような気持で、私は座長席の高階秀爾氏のほうをあらためて見やったのであった。

さて、これにくらべれば、私たちの岡崎市美術博物館は1996年に開館されて、今年でようやく十周年。若い若い。これからさらに研鑽を重ね、すぐれた作品・資料の収集につとめ、岡崎市および周辺の市民の皆様への文化奉仕に励んでゆこう。皆様の厚志と御支援を得て、いつかはフジタ展を企画できるぐらいに大きな館となりたいものである。

ESSAY

# 開館10周年を機に マインドスケープからエコール・ド・パリまで

学芸員 村松　和明

岡崎市美術博物館は、この7月6日で、10周年を迎えることとなった。開館当初に付された愛称「マインドスケープ・ミュージアム」は、心を語る美術館というコンセプトによって、今までとは少々異なった視点の美術館として注目を集めたものであった。

当初は、芸術はもちろん、歴史、科学、民族学、情報科学にいたるまで、広範な心の世界観を提示しようと気負いながら、次の4つの基本コンセプトを設けていた。

1、「16．5世紀」―岡崎に生まれた徳川家康が活躍した16世紀中頃は、世界史的に見ると大航海時代の後半期、国際的な文化・経済の交流がおこった重要な時代として位置づけた。

2、「マインドスケープ Mindscape」―心の形・心の風景という造語。美術のみならず、宗教や哲学、心理学や自然科学が探求してきた人間の内奥から、心の作用がつくりだした世界を研究、展示。

3、「バロック」―ゆがみや極端さをもつ表現。徳川家康が見た世界の芸術潮流を機軸に、心の美術を構成。

4、「東と西の出会い」―東のアジアが西のヨーロッパと出会った時代、世界の民俗文化、宗教や生活、祭りや祈りなどの≪東の心・西の心≫に注目し、東西文化の出会いの場を検証。

この4つのコンセプトは、大きく分ければ、「家康の生きた時代」（「16．5世紀」「バロック」「東と西の出会い」）と「マインドスケープ」に分類されることになるが、これらは10年の歳月を経て、次第に淘汰され、今ではっきりと輪郭が浮かび上がり、館の収集や活動へと結びついてきたという感がある。

まず「家康の生きた時代」関連の展覧会（p.4-5参照）は、1997年に「東と西の出会い」「イタリアバロック絵画展」にはじまり、1998年に「蓮如・ルター・民衆」、1999年「ルーベンスとバロック絵画の巨匠たち」「大ザビエル展」、2000年「カラヴァッジョ展」、2003年「流転するバロック」と継続的に開催してきた。バロックとその時代を扱う美術館は国内でも少ないことから、館のひとつの特徴となった。また、「東と西の出会い」から派生した「シルクロード」も、1998年「黄金のシルクロード」にはじまり、1999年「シルクロードの煌き」、2002年「遥かなるイスタンブール」、2005年「魅惑のサマルカンド」など、東西交流の諸相の数々を紹介してきた。

一方、「マインドスケープ」は、抽象的なカテゴリーであるため、特定する対象は難しいところだが、現代の「心」を扱う美術館としては、20世紀最大の芸術運動「シュルレアリスム」が重要な示唆を与えるものとして間もなく加わり、今では館の中心的位置づけとなっている。「マインドスケープ」という不思議な造語に類縁性を感じさせるこの運動は、20世紀初頭のパリで「心の開放」を求めておこったものである。この関連の展覧会として、1998年にパリ、ポンピドー・センターの協力を得て開催した「シュルレアリスムの巨匠展」を皮切りに、2001年にマグリットやデルヴォーを扱った「ベルギーの巨匠5人」「マックス・エルンスト展」、2002年に「ミロ展」、2004年「マン・レイ展」、2005年「アルプ展」と、これもまた継続して開催してきた。この系統の作品収集にも力を入れており、現在ではシュルレアリスム関係の作品は100点を超え、国内でも屈指のコレクションとなった。さらにそれは東西の現代美術、たとえばアンフォルメルや具体の作家の作品にまで及び、美術における「東と西の出会い」ともいえる広範な表現をたどることができるまでになった。

このような活動を踏まえ、10周年にふさわしい企画として開催したのが今回の「エコール・ド・パリ～野生への郷愁」である。20世紀初頭のパリは、シュルレアリストやエコール・ド・パリの画家たちが、ともにモンパルナス周辺を中心に活動しており、プリミティヴ・アート（原始美術）の表現にみられるような、純粋な造形表現に強く惹かれるといった同時代性があった。また、エコール・ド・パリの画家たちは、世界各国から参集してきた異邦人であったことも特徴で、イタリアからモディリアーニ、ポーランドからキスリング、ロシアからシャガール、そして日本からは藤田嗣治らが集まった。彼らはそれぞれの出身国の民族性・土俗性（根源的としてのプリミティヴ）を根底にとどめながら、パリで自らの芸術表現を見いだしていったといえる。このような状況は、20世紀芸術における「東と西の出会い」の顕著なる事例であり、パリにおける「レ・ザネ・フォル（狂騒の時代）」は、まさにそのようにして生まれたのであった。本展は、このように両大戦間に揺れ動いた彼らの心と、シュルレアリストたちが追い求めた「心の開放」のための純粋性とのつながりをみせたプリミティヴィスムをとりあげて、当時の芸術表現とその思潮を検証しようとする新たなこころみであった。当館のコンセプトから企画構成されたこの展覧会は、パリ市立近代美術館の学芸員、ソフィー・クレップス、ジャクリーヌ・ムンク両氏の協力を得て実現したしたものだ。今回日本初公開となったモディリアーニ（表紙）も、シャガールやドランの傑作（fig.1）も、彼女たちの力添えがあったからこそ出品できたものである。その観点からすれば、この展覧会自体も、日本とフランスの「東と西の出会い」によって成しえた「マインドスケープ」のひとつのかたちであったといえるのかもしれない。

この10年、このような活動が積み重ねられ、それが館の糧となって次の展開が開かれてきたように感じている。これからも、その経験を活かし、皆様のお力添えをいただきながら、当館が意義深い次の段階へと移行できるような活動を続けてゆきたいと考えている。

fig.1　アンドレ・ドラン
《画家の姪、ジュヌヴィエーヴと林檎》
1937-38年　油彩・カンヴァス

画家の姪、ジュヌヴィエーヴさん（中央）と、パリ市立近代美術館のソフィー・クレップスさん（右）と筆者。出品交渉に行ったドラン邸にて。

1996
プレ企画

1996.7.6
6:00p.m.
オープン

セレクション展

1998

文人画の世界

意匠の美

新収蔵品展

# 岡崎市美術博物館
# 10年の歩み

2001

向かって右から10年選手の鈴村副主幹、
芳賀館長と荒井副館長

2002

新収蔵品展

2003

ルオー
「ミセレーレ」
を中心に

2004

2005

祈りの世界

1997

甲山焼の世界

大 樹 寺

1999

2000

マインド
スケープ
美術館

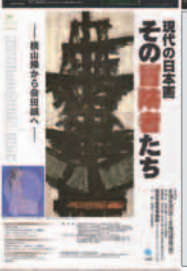
江戸時代
岡崎の文芸資料
を中心に

岡 崎 城

バロックへの
誘い

日本画家
福田翠光
専福寺の名宝

展示環境を10年
守り続けた空調
担当の杉山さん




岡崎城下町の
文芸

観感興起
−花鳥・山水

お客さまに
心地よいひと時を。
ベテランぞろいの
お掃除チーム

2006

EXHIBITION ESSAY

# アートに生きる、アートで元気!

会期　平成18年8月5日（土）～9月24日（日）

学芸員 千葉　真智子

8月5日（土）から始まる展覧会は、その名も「アートに生きる、アートで元気!」です。一体何のことやらと思われるかもしれませんが、このタイトルは、大人だけでなく夏休み中の子供たちにも美術に親しんでもらいたいとの思いから生まれたものです。したがって展覧会のモットーは、当館のコレクションに子ども美術博物館のコレクション（子ども美術博物館には、有名作家の10代の作品だけでなく、作家から子どもたちへ贈られたメッセージ作品など、なかなかお見せする機会のないコレクションが数多くあります）を加えたおよそ80作品を「美術の根本的な特徴を通して、分かりやすく紹介し、何より楽しんでもらう」というもの。そのためにワークシートを準備するほか、小川信治さん、国島征二さん、松蔭浩之さんの三人の現代美術作家を講師に招いて、各1回ずつのワークショップも開催します。

西洋で言えばキリストの生涯を描いた教会壁画を、また日本で言えば、源氏物語絵巻や縁起絵巻を思い起こせば分かるように、美術作品はその誕生以来、メッセージを伝え、物語を目に見える形に表現してみせるものでした。そこで、第1章では、こうした美術のもつ物語性という側面を紹介し、また関連イベントとして、小川さんのワークショップ「無限風景画を作ろう!」を開催します。これは、参加者それぞれが描いた一枚一枚の風景画を小川さんの絵で繋ぎ合わせ、絵巻や映像のように連続する風景画に変化させるという試みです。こうして出来上がった風景画を歩きながら眺めていくことで、参加者は、流れ行く時間と共に、様々な物語を構想することになるでしょう。

つづく第2章では、対照的に「見えない／見せない」表現についてご紹介します。作品の構想を綴った大量のメモを梱包したデュシャンの作品、あるいは普段無意識の内に目にしている建物や事物を梱包し、視界から隠してみせるクリストの作品など、視覚芸術でありながら、様々なものを閉じ込め、敢えて見えないものとして表現してみせる美術作品は非常に多く存在します。本章に連動したワークショップを受け持つ国島さんの《Wrapped Memory》—訳せば「梱包された記憶」—は、毎日のように届く展覧会の案内状を一か月分まとめて梱包し、樹脂で固めた作品ですが、もはや中身を確かめることもできないこうした作品を20年以上にわたり制作し続けるという行為は驚きであると同時に、美術と人間の非常に近しい関係を物語ってもいます。ワークショップ「美術で秘密を閉じ込めよう!」では、その国島さんと一緒に作品を見た後に、参加者にも実際に梱包作品を制作してもらいます。

国島征二　《Wrapped Memory-Gallery Announcement May-June 1994》

最後の第3章では、20世紀以降の多様化する美術表現において、如何に作者以外の要素が作品の成立にかかわっているかをご紹介します。絵具が流れ落ちるままに任せたサム・フランシスの作品や、フロッタージュ（擦り出し）やデカルコマニー（転写）によって浮かび上がった形にインスピレーションを得たエルンストの作品群、また「光」を利用して生み出されるマン・レイのソラリゼーション写真など、偶然性に依拠した作品は枚挙に暇がありません。いわば、美術作品は、私たちが自分以外のものに出会い、驚きや悦びを体験する場でもあるのです。そこで、松蔭さんを講師に迎えたワークショップでは「レイヨグラムに挑戦!—カメラなしで、いろんなものを写しちゃえ!」と題して、様々な物や参加者の身体までをも印画紙の上に直接写し出す巨大レイヨグラムに挑戦し、美術作品を通して「光」と、また「光」を通して、自分の身体に出会ってもらいます。光が如何に豊かなものであるか、光を介することで、予想を超えて如何にわくわくするようなイメージを目にすることができるのかを実感する機会になるでしょう。

マックス・エルンスト《風景》1939

この機会に、できるだけ多くの人に美術に触れ、また作家と触れ合うこのできるワークショップを通して、その悦びを実感していただければと思います。

EXHIBITION ESSAY

# 徳川四天王展に寄せて
## ―徳川四天王と豊臣秀吉―

会期　平成18年10月7日（土）～11月19日（日）

学芸員 堀江　登志実

当館では10月7日　から11月19日　まで「徳川四天王展」の開催を予定しています。本稿では同展に寄せて、準備を進めるなかで気づいた点を紹介してみましょう。

徳川家康の天下統一には譜代家臣の存在が大きな役割を果たしているといえましょう。なかでも、4人の家臣、酒井忠次、本多忠勝、榊原康政、井伊直政の存在は大きく、世に徳川四天王と呼ばれています。彼らは家康に仕え、三河統一、遠州・駿河等における武田氏との戦い、さらには小牧長久手合戦など豊臣秀吉との戦いを経て、関ケ原合戦までを家康とともに歩みます。

4人のプロフィールについては紙幅の関係で省略しますが、ここでは徳川四天王という呼称が家康家臣のなかでも4人を指すようになるのはいつ頃からなのかを考えてみたいと思います。

徳川四天王という表記は見出せませんが、岡崎藩本多家家老の中根家に伝わる18世紀の史料のなかに、酒井・本多・榊原・井伊を徳川四臣と称する言葉があるので江戸時代から徳川四天王を先の4人とする認識があったことはたしかでしょう。徳川四天王とは別に徳川三傑という言葉があります。家康より15歳も年上で活躍時期も少し違う酒井忠次を除く3人を指すものです。また、徳川十六将という、徳川四天王の4人を含め、鳥居元忠・大久保忠世・平岩親吉など家康に仕えた三河武士16人を言うものもある。徳川十六将については、家康の三河時代に亡くなる蜂屋半之丞も含み、そのメンバーの範疇については判然としないものがあります。

徳川四天王をこの酒井忠次、本多忠勝、榊原康政、井伊直政の4人とする認識は江戸時代から今日まであるわけですが、それが形成されるうえで豊臣秀吉の存在が大きな役割を果たしたと考えらます。家康が秀吉と対立する天正12年（1584）から、臣従して上洛する天正14年ごろにかけて、4人は秀吉の目にとまり、徳川方の有力武将として秀吉の高い評価を得るようになります。たとえば、『家忠日記』天正14年4月19日条によると、家康が秀吉の妹旭姫との婚姻祝言を、秀吉のもとに天野康景を使いとして遣わしますが、秀吉は天野を無名のものだと怒り、酒井・本多・榊原の3人のうちの1人を参上させることを要求します。また、天正14年10月、家康は秀吉のもとに上洛し、秀吉との謁見が済むと岡崎に人質として置かれていた秀吉生母大政所を帰洛させますが、その護衛を務めた井伊直政を秀吉は饗応、その人物を気に入り直政に「豊臣」姓を与え、従五位下に叙するほどであったといいます。

《榊原康政像》東京国立博物館蔵

《井伊直政像》彦根城博物館蔵

《酒井忠次像》京都・先求院蔵

《本多忠勝像》個人蔵

天正18年、秀吉の指示で家康は関東に移されますが、関東における家康家臣団のなかでも最高の知行高を得たのは井伊直政の12万石であり、本多忠勝・榊原康政の10万石とともにこれらは他の家臣と比較にならぬほどの高い知行高でした。最近の研究では3人の知行高、さらに家臣配置には秀吉の意思がはたらいていたことがあきらかにされています。

関東諸城の制圧に功のあった本多忠勝に秀吉は「佐藤忠信の兜」と称するものを下賜し、本多家ではこれを大事に今日まで伝えています。江戸時代、秀吉のことは伏せ置かれるべきところですが、同家ではこれを誇りとして「兜記」という由緒記を認めるほどでした。

徳川四天王にとって秀吉は主君家康の敵対者でしたが、秀吉によりその存在を認められることにより、徳川家臣団内における存在の地位を高めてゆくのです。

# INFORMATION

## ■展覧会スケジュール

**2006年6月3日(土)～2006年7月30日(日)**

**特別企画展　エコール・ド・パリ展 野生への郷愁**
**－モディリアーニ、フジタからルソー、シャガールまで－**

**2006年8月5日(土)～2006年9月24日(日)**

**アートに生きる、アートで元気!**

**2006年10月7日(土)～2006年11月19日(日)**

**特別企画展　徳川四天王展**

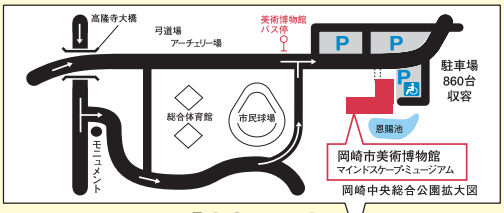
## ■サタデー・ナイト・シアター

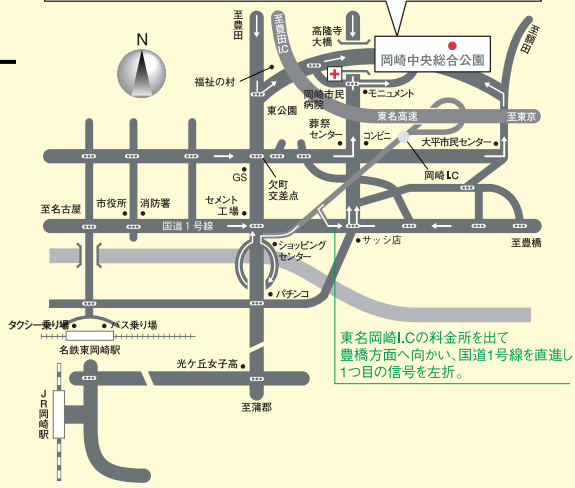
**7～11月の第2土曜日・午後6時～　鑑賞無料　先着70名　於当館セミナールーム**

7月 8日「いとこ同志　Les cousins」(1958年／110分)
8月12日「モード家の一夜　Ma nuit chez Maud」(1968年／110分)
9月 9日「友だちの恋人　L'ami de mon amie」(1987年／102分)
10月14日「はなればなれに　Bande à part」(1964年／96分)
11月11日「女は女である　Une femme est une femme」(1961年／84分)

●開館時間／午前10時～午後6時(6月～9月)
午前10時～午後5時(10月～5月)
午前10時～午後8時30分(6月～11月までの土曜日)
〈入館は閉館時間の30分前まで〉
●休　館　日／毎週月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない日)
年末年始(12月28日～1月3日)
※展示替えのため臨時休館することがあります。

◎公共交通機関／名鉄東岡崎駅バスのりば②より25分、
(名鉄バス)　「中央総合公園」行「美術博物館」下車徒歩3分
◎タ　ク　シ　ー／名鉄東岡崎駅から約15分
JR岡崎駅東口から約20分
◎自　家　用　車／東名高速道路・岡崎I.Cから約10分




OKAZAKI
CITY MUSEUM

Arcadia

【岡崎市美博ニュース／アルカディア】
●Arcadia　第29号　●2006年7月発行　●編集・発行　岡崎市美術博物館(マインドスケープ・ミュージアム)

岡崎市美術博物館
〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町峠1 岡崎中央総合公園内
TEL0564-28-5000(代表)
ホームページ　http://www.city.okazaki.aichi.jp/museum/ka111.htm

PRINTED WITH SOYINK
R100 本紙に古紙配合率100%再生紙を使用しています。